【性的マイノリティについての講義レポート】

セクシャルマイノリティについての講演 レポート

琉球大学 理学部４年

今回の講義では「自分らしく生きる大切さ～性同一性障がいから学んだこと～」というテーマで，現在は消防職に就いている又吉弥篤(ミクト)さんに講演をいただいた．又吉さんのお話は，とても貴重なものだった．おそらく話すことは痛みを伴うものであったと思う．それでも私たちのために，未来の社会のために話してくださった又吉さんに，まずは感謝と敬意を表したい．本当にありがとうございました．

講演を通して，私は日本の社会にまだまだ根強く残る構造的な問題を実感した．又吉さんは「性同一性障がい」という診断名に救われたと言っていた．しかしさらに未来を見据えれば，診断名が無くても当たり前の生活が出来ることこそが望ましい状態であるはずで，診断名がなければ最低限の配慮も受けられないという状態は今の日本社会がどれだけ発展途上にあるのかを強く感じさせる．日本での LGBTQ+の人口比は 8.9%ということであったが，これをマイノリティとしていること自体にも疑問を感じた．例えば，日本の全人口に占める大学生の比率はたったの 2%程度である（旺文社教育情報センターより）．数字の上だけで言えば大学生の方がずっと少ない比率だ．にも拘わらず大学生をマイノリティと呼ぶ場面を（少なくとも私は）見たことはない．言葉は分かりやすさを示してくれる一方で，ファジィな概念に無理やり線引きをし，それによって社会的排除を引き起こす可能性を持っていることも忘れてはいけないと思う．

中学時代のエピソードで，社会科の教員にスカートの下のズボンを脱ぐよう指導された話では，そもそもの部分で引っかかるものがあった．それは「心の性と身体の性が一致している女子生徒であれば，この指導は適切だったのか？」という点だ．制服が規定されていることで生徒側に選択肢が与えられていないこと自体も問題だが，少なくとも心の性と身体の性が一致している女子生徒だとしても，これは立派なセクシャルハラスメントとなるのではないか.「ルールだから」というが，ルールとは誰かの幸せを守るために存在しているはずだ．スカートの下にズボンを履くことが，いったい誰を不幸にするのか．教育現場の問題は，そのまま日本という大きな社会の問題に直結する．だからこそ，私たちが考えていかなければいけない一番の優先課題は教育問題であると思う．

近年は SDGs の認知の拡大からで教育を含む多くの社会問題是正が叫ばれてはいるが，そこから逆に排除されてしまう存在がいることも忘れてはいけない．例えばジェンダー平等は SDGs で掲げられているが，セクシュアリティの問題は挙げられていない．そうした見えづらい排除を減らしていくことが本当に重要なことだと思う．

私は以前，女装をして街を歩くという体験をしたことがある．特に深い意味はなかったが，自分の知らない目線を体験してみようと思い，友人の女性３人にメイクをしてもらって，ショッピングモールへプリクラを撮りに行った．ただ，やはりウィッグの質感や体格的なシルエットなどは傍から見ても分かるものなのか，少し目立っていたと思う．女装をする（＝身体の性と別の表現性をする）とこれほどまでに周りからの視線が気になるのだという事を，私はここで初めて経験した．そして一番困ったことは，トイレだった．男子トイレを使おうか，女子トイレを使おうか迷ったが，結局答えは出せず多目的トイレを使用した．多目的

【性的マイノリティについての講義レポート】

トイレがあったから良かったものの，そうでなかったら本当に大変だった．だからこそ，又吉さんの苦悩は（知ったような口で失礼かもしれないが）分かる気がした．

講演を通して，強く問題意識を感じたことがある．それは「痛みを知らない人間こそ，他人に痛みを与えてしまう可能性を強く持ってしまっている」ということだ．単純に皆が痛みを経験すれば良いという事でもないと思うが，それでもある程度以上の共感性を育てていける土壌づくりや仕組みづくりは急務であると感じる．この世に存在するあらゆる痛みを知ることは確かに難しいことであるとは思う．しかし他人の痛みに直面したとき，自分の持つ価値観だけに縛られず，痛みに寄り添い解決策を模索する意志を持つことは出来るはずだ．また，それこそがアクセシビリティリーダーとして活動していくうえで重要な地盤であると思う．

現代社会を見渡せば，人は何かと比較し，優劣をつけ，争い，お互いに傷つけあう性質を持っているように感じてならない．しかし一方で，どんなときにも優しさを忘れず．弱者に寄り添い，人の痛みに涙し，未来の子どもたちに笑顔のために頑張れるのも，人間の持つ素晴らしい性質なのだと思う．私たちはあまりに知らなさすぎる．しかし，だからこそ，知ろうとする歩みを止めてはならない．知ることからしか，人と人とが分かりあって尊重し合える社会は生まれない．

辛い道のりだった．

けど一生懸命生きてきて良かった．

私たち一人ひとりが目指す未来は，きっと明るいものであるはずだ．そのために今自分が何をなすべきなのかを改めて考えたい．生きていれば希望はある．私も痛みを抱える誰を照らすことのできる光となりたいと強く思う．

以上